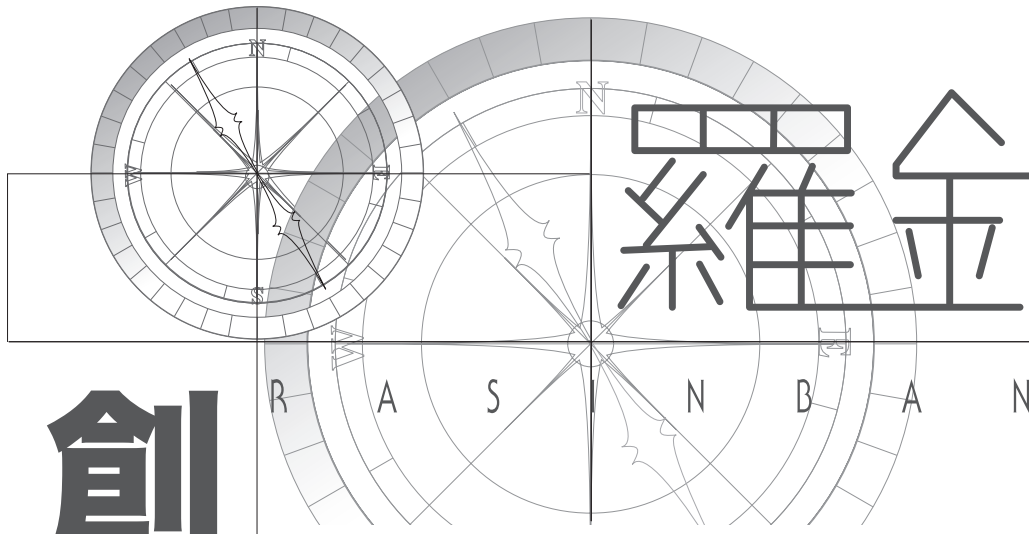


# 金住系 盤舟

COMPASS

http://www.hodo.in.net

発行所: 東京都豊島区南池袋  
一丁目十三番十六号  
日蓮正宗法道院法華講  
03 (3984) 2650



## 大御本尊から離れた創価学会

日蓮大聖人の仏法を正しく信仰すること  
は、大聖人以来の血脈に随順して、根本の法体で  
ある本門戒壇の大御本尊を信受することであり、  
その信仰にこそ真実の功德と成仏があるのです。  
しかし、現在の創価学会員は、総本山大石寺に  
参詣することも、本門戒壇の大御本尊を拜むこと  
もできない状態です。

それは創価学会が許されざる謗法集団と断定さ  
れたからにはほかありません。

創価学会では、会員に対して、総本山に参詣で  
きなくなった理由として、

「宗門が学会員の参詣を拒否したから」

「大石寺が謗法の山となったため、参詣し供養す  
ることは謗法と同になるから」

「現在、戒壇の大御本尊は、日蓮宗に乗っ取られ  
た状態にあるから」などと言いつつ、  
大御本尊から離れた者が、いかに理屈を並べても、  
正しい教えから外れているという事実には変わり  
はないのです。

### 【資料】

「本門戒壇の御本尊は、究竟(くつきょう)の  
中の究竟、本懐(ほんかい)の中の本懐なり。既(す  
で)に是(こ)れ三大秘法の随一なり」(日寛上人  
文段一九七ページ)

## 唯授一人の血脈を否定する創 価学会

「総本山の大御本尊にお会いするのは、親もと  
へ帰りたいといった気持ちで、なつかしがって  
くるようであればなりません」(戸田城聖全集二  
二七ページ)

創価学会は、血脈について、

「法主だけに流れる血脈などはない」

「信心さえあれば誰にでも血脈が流れる」

「創価学会の信心にこそ血脈が流れている」など  
と主張していますが、これは明らかに日蓮大聖人  
の御教示に背く邪説です。

このように創価学会は、一方では唯授一人の血  
脈の存在を全面的に否定しながら、もう一方では  
「法主の血脈が途中で断絶した」とか、「相承の儀  
式が行われていない」「血脈が汚れた」などとい  
つて、唯授一人の血脈の存在を認めたくえで誹謗す  
るなど、まったく矛盾した言動を繰り返していま  
す。

つまり、創価学会には宗祖大聖人以来の唯授一  
人の血脈に関して、一貫した主張などはなく、た  
だ唯授一人の血脈の尊厳を貶(おとし)めようと  
する「罵(のの)しり」があるだけなのです。

### 【資料】

「よく信心の血脈を問題にする者がいる。生死

一大事血脈抄に『信心の血脈なくんば法華経を持  
つとも無益なり』とある文をもって、信心さえあ  
ればよいとする立論である。誰でも自由に継承で  
きるなどというのはこれだ。(中略)有名無実の  
信心をふりまわして、付属相承(ふそくそうじょ  
う)を否定するは、総別の二義に迷惑し、師弟  
相對の深義に暗く自ら混乱を好むわざではない  
か」(大白蓮華 掲載論文 昭和四十一年九月号  
三十五ページ)

「正信会の輩が血脈の否定にいかなる口実をか  
まえようとも、この本質は彼らの信心の根本の  
狂いにある」(平成三年一月一日付文書『お尋ね』  
に対する回答) 秋谷栄之助 大日蓮号外八九ペ  
ージ)

## 僧宝を誹謗する創価学会

総本山第二十六世日寛上人は、『当家三衣抄(と  
うげさんねしょう)』に、

「南無本門弘通の大導師、末法万年の総貫首、  
開山・付法・南無日興上人師。南無一閻浮提の座  
主、伝法・日目上人師。嫡々付法歴代の諸師」(六  
巻抄二二五ページ)

と仰せられ、日興上人をはじめとする代々の御法  
主上人を僧宝として敬うべきことを教えられてい  
ます。

しかし、創価学会はこの日寛上人の御教示に反  
して、日興上人お一人が僧宝であると決めつけ、

# 創価学会の誓ひ(6)

御歴代上人に対してさまざまに誹謗中傷を加えています。

これら創価学会の法主誹謗は、会員に「法主にも誹謗や誤りがある」との考えを植えつけ、創価学会を破門した処置は「日顕（上人）の誤りによるもの」であり、「学会には非がなかった」と、自らを正当化するためのものなのです。

しかし、創価学会が日蓮正宗から破門された原因は、ひとえに創価学会が誹謗を犯したからであり、その責任はすべて池田大作にあるのです。にもかかわらず、その一切の責任を日顕上人になすりつけるなどは、卑劣きわまりない行為というほかはありません。

創価学会は連日、口をきわめて日顕上人を誹謗し、御歴代上人の非をあげつらっていますが、日蓮大聖人は、『四恩抄』に、  
「僧の恩をいはゞ、仏宝・法宝は必ず僧によて住す」（御書二六八ページ）

と仰せになり、僧宝によって仏宝・法宝が正しく伝えられていくことを示され、僧宝を敬うべきことを教えられています。

御法主上人への悪口雑言（あっこうぞうごん）を繰り返す創価学会は、僧宝誹謗の大罪を犯し、日蓮大聖人の教えに反逆していることを知るべきです。

【資料】

「人のなかでも、りっぱな僧侶と名づくべき百数十人の小さな教団がある。この教団こそ日本の宝であり、仏のおおせの僧宝である」と、万人の尊敬すべきところで、まことにめずらしい教団である。日蓮正宗の僧侶の教団こそ、これである」（戸田城聖全集一―四三ページ）

『ニセ本尊』を配布する創価学会

創価学会は平成五年十月に至り、突然、本尊を勝手に作成し配布し始めました。

この本尊は、栃木県・淨圓寺（じょうえんじ）に所蔵されている日寛上人御書写の御本尊をコピーし、さらに御本尊に認められていた「本證坊日證授与（ほんしょうぼうにっしょうじゅよ）」という授与書きを抹消して作り上げたものです。

日蓮正宗では、この創価学会作成の本尊を『ニセ本尊』とっています。

その理由は次の三点に要約されます。

- 御法主上人の許可を受けていない
- 総本山から下附されたものではない
- 創価学会が勝手に作製したものである

創価学会では、「自分たちは和合僧団であり、信心の血脈が流れているから、御本尊を配布する資格がある」「広布を願う一念があれば資格がそなわる」などと吹聴しています。

しかし、『本因妙抄』に、  
「血脈並びに本尊の大事は日蓮嫡々座主伝法（にちれんちやくちやくざすでんぼう）の書、塔中相承（たっちゅうそうじょう）の稟承（ほんじょう）唯授一人の血脈なり」（御書一六八四ページ）

と御教示されているように、戒壇の大御本尊の護持並びに御本尊の書写と授与など、御本尊に関する一切の権能は、唯授一人血脈付法の御法主上人に限るのです。

したがって、創価学会が勝手にコピーして作った『ニセ本尊』は、姿や形は日寛上人の御真筆とそっくりであっても、御法主上人の許可も開眼もないので、御本仏の「たましい」が込められていない偽物です。

しかも『ニセ本尊』は、正法に敵対する者の手によって作られたものですから、『ニセ本尊』には魔の力がこもっており、これを拜むと大謗法の罪によって敵罰を受け、永く地獄に墮ちる結果となります。

【資料】

「いわゆる付属のないもの。これは偽札本尊といって、これらを本尊と立てる連中は、御本尊は誰が書いてもよいなどと考えているのである」（折伏教典改訂三十二版三四五ページ）

「ただ、大御本尊だけは、われわれは作るわけにはゆかない。日蓮大聖人様のお悟り、唯授一人、代々の法主現下以外にはどうしようもない（中略）ニセですから、力がぜんぜんない。むしろ、魔性が入っている。魔性の力が入っている。だからコワイ」（戸田城聖指導 大白蓮華 昭和三十四年七月号九ページ）

創価学会に功德はない

創価学会では「新しい御本尊（ニセ本尊）に替えたら、功德がパンパン出た」などの話を、さかんに会員に吹き込んでいます。しかし、創価学会の『ニセ本尊』を拜んでも功德は一切ありません。たとえ『ニセ本尊』で願いが叶ったなどの現証があつたとしても、それは魔の通力によるものです。

真の功德と魔の通力の違いは、一つには、信受する教えが正しいものであるか邪なものであるかによって判別されます。真の功德は、正法である日蓮大聖人の仏法を正しく信仰することによってのみ生ずるものであり、反対

に、いかに利益めいた現証があつたとしても、邪義邪宗によるものはあくまでも魔の通力でしかないのです。

二つ目の違いは、正しい信仰によつてもたらされる功德とは、さらに大きな功德となつて、成仏の境界に導かれていくものですが、魔の通力による現証は、魔の用（はたら）きによつて貪・瞋・癡の三毒が強盛となり、最後には必ず三悪道に引き込まれる結果をもたらすものなのです。

現在の創価学会会員は、大謗法集団の中に身を置いているのですから、心身ともに汚され、人格が破壊されていくばかりであり、大御本尊の功德など微塵もありません。

『論語』に「過つて改むるに憚（はばか）ること勿れ」（国語大辞典 小学館）の言葉もあるように、あなたは一日も早く勇気をもって誤つた創価学会を脱会し、日蓮大聖人の仏法を正しく捧持（ほうじ）する日蓮正宗に帰依すべきです。日蓮正宗の信徒として正しい信心修行に励むとき、初めてあなたは御本尊の大利益に浴し、身も心も清浄となつて即身成仏の大功德を得ることができるのです。

『折伏教本』より抜粋

御案内

法道院では、毎週水曜日の午後七時より水曜講を開催しています。

内容は、信徒の体験発表や御僧侶の法話など充実したものとなっています。

御参加を希望される方は、法道院法華講事務局まで、お電話いただければ、ご案内させていただきます。

〈電話〉〇三（三九八四）二六五〇